

Title	社会主義と国家 (三)
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.4 (1923. 4) ,p.553(57)- 570(74)
JaLC DOI	10.14991/001.19230401-0057
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230401-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第十七卷 (五五二) 論 説 鐵道經營の獨占的傾向に就て

第四號 五六

Johnson & Van Metre, Principles of Railway Transportation. — Johnson and Huebner, Railroad Traffic and Rates. Vol. I & II. — Ripley, Railroads, Rates and Regulation. — do., Railroads, Finance and Organisation. — do., Trust, Pool and Corporations. — Noyes, American Railroad Rates. — Newcomb, Railway Economics.

社會主義と國家 (三)

小泉 信三

(十)

労働者階級がブルジョワシイの抑壓から解放せられた曉に國家は何うなるか。 Lassalle に従へば、其曉に始めて労働者階級の國家觀が實現せられると謂ふのである。労働者の國家觀は何を其特色とするか。 Lassalle は此を第三階級の國家觀と對照して居る。彼れが茲に第三階級の國家觀と稱するものは、マンチエスタア派自由貿易論者の、個人人格の自由と所有權との保護を以て國家の能事畢るとなす見解で、Lassalle が之を嘲つて夜警的國家觀(Nachtwachteridee)と命名したのは、此の國家觀に従へば、國家の任務は夜警の任務と同じく、強盜盜を防ぐ一事にのみ存し、盜賊のない處では國家も亦無用物となると云ふに歸着するからであると謂ふ(Pr O. 45)。第四階級の國家目的觀は此れと全く異なるものである。第四階級の見

解に従へば、人類の眞使命は國家を俟つて始めて果たされ、人類の文化と自由とは國家を俟つて始めて實現せられるのである。此の第四階級の國家觀を説く數節は、恐らく Arbeiterprogramm 中最も精彩ある文字と稱すべきものであらう。それに謂ふ、

抑も歴史とは、人間の自然、困窮、無智、貧困、無力との鬭争、即ち人類が歴史の始めに現れた時の状態たる、有ゆる不自由との鬭争である。益々此の無力の状態を克服すること、これが歴史に示されてゐる自由の發展である。若し此鬭争を各人單獨に自力を以て行ふか、或は行はうとしたならば、吾人は終に一步をも前進することが出来なかつたであらう。「此の自由の發展、此の人類の自由への進化を遂げしむべき職分を有するものは國家である。國家は個々人を結合して一の倫理的全體を形成せしめる此一致である。此結合に含まるゝ一切個々人の力量を、個人としての彼等全員に屬する力量を、百萬倍せしむる一致である。されば國家の目的は、單に個人の爲めに人格的自由と財産とを保護することではない。「國家の目的は正に此結合に由つて、個人をして能くその單獨に到底成就すべからざる目的を成

就し、單獨に到達すべからざる生活の段階に到達することを得しめ、彼等をして能くその個人としては全然到達すべからざる程度の教養と威力と自由とを獲得せしむることに在る。従つて國家の目的は、人間をして積極的發展と不斷の進歩とを遂げしめることにある。換言すれば、人類の使命、即ち人類の能く實現すべき文化を實現せしむること、自由に向つて人類を教化し進化せしむることにある。」

これが「國家の眞の倫理的本質」である。然るに社會の最下層たる労働者階級は、本と孤立無援の境遇に居るところから、國家の任務が個人を援けてその單獨に能くせざるところの發展を遂げしめることに存することを強き本能を以て直覺するのである。

労働者階級の理想の行はるゝに至つた曉の國家は、最早從來の國家の如く事情に促がされて已むを得ずするのでなくて、充分自覺して此の「國家の倫理的本質」を其任務とするであらう。從來已むことを得ずして斷片的に、不充分に行はれた事を進んで最も徹底的に完成するであらう。而して正に此事に依つて、國家は、歴史上未だ其比喩を見ざる精神の高翔と、幸福教養安寧自由の増進とを齎らし、史上の

最も光輝ある時代も之に對しては其光りを失はざるを得ぬに至るであらう。これが正に勞働者階級の國家觀と稱せらるべきもの、その國家目的に關する見解であつて、正に勞働者階級の普通選舉の主義がブルジョワジイの制限選舉の主義と異なるが如く、國家目的に關するブルジョワジイの見解と遠ざかること甚しきものである。(a. a. O. 45-47)

(十一)

Das Arbeiterprogramm の出版が無産階級の有産階級に對する憎悪及び輕蔑を挑發するものとして告發せられたので、Lassalle は法廷に於ける辯護の爲めに Die Wissenschaft und die Arbeiter. Eine Verteidigungsrede vor dem Berliner Kriminalgericht. Zürich 1863. 及び Die indirekte Steuer und die Lage der arbeitenden Klassen. Eine Verteidigungsrede vor dem königl. Kammergericht zu Berlin. Zürich 1863 なる二小冊子を著して、前者の中に於て「勞働者綱領に説くところを反覆し、又後者の末段に於て、渠は三度ブルジョワジイの國家觀と己れの國家觀との差別に言及して居る。渠は勞働者の任意聯合 die freiwilligen Assoziationen を欲するものではあるが、此任意聯合は開化を助ける國家の守護の下

に於て (unter der hilfreichen zivilisatorischen Aegyde des States) 始めて可能ともなり、其効果を發揮するものとも認めることを述べた後、續けて「私は國家にその史初以來爲し來り、又今後永久に爲すであらう通り、人類の萌芽を發展せしめ、凡べての人の爲めに存在する機關として其保護の手を以て一切人の人間的境遇を造ると云ふ高き偉大なる任務を負はしめるものである。此學説は……決して破壊の學説、野蠻の學説ではなくて、最高度に於ける一國家的學説である！諸君裁判官に向つて曰ふは固より國家を憎悪する彼の近世の蠻人たるマンチエスタア主義者に屬するものではない。嘗に此の若しくは彼の一定の國家を憎み、或は此の若しくは彼の國家形態を憎むのでなくて、一般に國家其者を憎み、その再三明かに承認したる如く國家を悉く撤廢せんとを希ひ、司法と警察とは求むるところ最も少き者に之を公賣し、戰爭は株式會社をして之を營ましめ、斯くしてその資本を以て武裝せる搾取慾に對する抵抗の全く何處にも其倫理的支點を求むること能はざるに至らしめんことを期する、彼の近世の蠻人たるマンチエスタア主義者に屬するものではない。諸君と予とを相互に分つ差別は如何に大なるにもせよ——此の有ゆる倫

理的なるもの、消滅に對立するときは、吾等は相互に手を携へるものである。一切文明の劫初のエスタの火、即ち國家を、私は諸君と共に彼の近世の蠻人に對して防護するものだ」と云ふのである (p. a. O. 387-8)。

此を讀んで受ける印象に由つて觀れば、Lassalle が解するところの國家は、永遠の昔から永遠の將來に亘つて其本質上不變なるべきものである。而して其國家は國家の理念から必然演繹せらるべき目的を有するものである。此目的は時としては誤認せられ、或は無視せられ、或は不充分に認識せられることがある。併し國家が國家として追求すべき目的は、その正しく認識せらるゝと否とを問はず常に儼存するのである。肝要の事は此國家の目的を正しく認識することであるが、其事は第四階級解放の曉を俟つて始めて行はれると言ふのである。Lassalle は既往の時々の支配階級が國家を其階級の利害擁護の爲めに利用した事を充分承認して居る。併しこれは、謂ふべくんば、國家の濫用曲用である。本來國家は階級闘争の機關ではない。國家は階級的衝突を超越して、客觀的に高さもの正しさものを追求すべき使命を帯びて居るのである。其眞使命が本來無産無援の境遇にある

労働者階級を俟つて始めて本能的に直覺せられると謂ふのである。既に國家の目的は階級闘争を超越するところに存するのであるから、Marx-Engels の場合に於ける如く、階級闘争の絶滅に由つて國家が無用となるべき筈がない。階級闘争の絶滅を俟つて、國家は始めて完全に、自覺的に、其眞使命を果たすことが出来るのである。Marx-Engels は階級別、階級對抗の一掃に由つて人類の前史は閉ぢ、其時を以て始めて人間は必然の王國から自由の王國へ躍出すると説いた。併し斯く人類が自由を獲得するのは、其時國家が消滅するからである。國家の存する限り自由はない。Marx-Engels はプロレタリアの手に掌握せられた國家權力が、プロレタリア解放の爲めに絶大の意義を有することを認めて居る。併し此國家は永遠に存すべきものではなくて、國家消滅に到達する爲めの缺く可からざる階梯として存するのである。若しプロレタリア國家は過去幾多の國家に對して特に一層高さ國家であると云ふことが出来る、とすれば、それは既往一切の國家は皆國家としての自己存続を主張するのみに、獨りプロレタリア國家のみは自己解消を當初からの目的として居ること、始めから無に歸することを目的として有るからだと謂

つても好い。國家は自由の實現に到達すべき階梯とはなり得るものである。併し自由の實現せらるゝときには國家は既に消滅してゐなければならぬ。自由其者と國家其者とは兩立しない。自由の實現が終局の目的であるとすれば、Marxismus に従へば、國家は已むべからざる惡である。

Lassalle の説くところに由つても、人類の前史は勞働者階級の解放を以て畢るものと解することが出来る。併し此時人間が始めて必然の王國から自由の王國へ躍出することを得るのは、國家が消滅するからではなくて、國家の眞の倫理的本質を正しく認識する勞働者階級の國家觀が始めて實現せられるからである。人間の徳も自由も Lassalle に従へば、共に國家を俟つて始めて實現せられるのである。Hegel を棄てた Marx は終に Hegel を脱却することの出来なかつた Lassalle との國家觀上に於ける相違は、茲に最も顯著に現れて居る。而して此相違は、Lassalle が das Arbeiterprogramm 中に説く階級隆替の學説は、明に「共產黨宣言」の variation と見るべきものであるのに、階級闘争説と不可離の關係ある國家觀に於ては Marx と所見を異にして、Marx-Engels とは正反對に國家禮拜 (Staatskultus) の思想を露呈して憚らぬ

爲めに愈々顯著となるのである。而して抽象的なる國家其者の崇拜は、やがて有ゆる國家の崇拜を意味する。此國家觀は他日共和主義者たる Lassalle と專制王國の戰士 (Bismarck) とを連繫し、革命家の Lassalle と反動主義の權化とを接續せしむる橋梁となつた。此國家觀は民主々義者社會主義者としての Lassalle のアキレス腱となつたのである (Bernstein, Ferdinand Lassalle. Eine Würdigung des Lehrers und des Kämpfers. 1919 167 ff. 參看)。

Rodbertus, Lassalle の主張を國家社會主義と呼ぶ意味に於て Marx-Engels の主張を國家社會主義と呼ぶことの許し難きは上記の説明に由つて充分明かにせられたものと思ふ。

然らばマルクシズムを以て國家社會主義又は國家共產主義となす無政府主義の主張とマルクシズムとの間には如何なる相違があるか。

(十二)

Engels は既記 Anti-Dühring 中の一節に國家による生産用具の掌握が行はれた曉「國家は『撤廢』せられずして死亡する。『自由なる庶民國家』の成語はその一時的煽動的

に用ゐらるゝことの許容せらるべきことも、その終局的學問的に不充分なることも、共に此事に照らして判断すべきである」と記した後に續けて「所謂無政府主義の、國家は之を今日より明日に撤廢せざるべからずとの要求の當否も、亦同じく此事に照らして判断すべきである」と謂つて居るが、Marx-Engelsの様々の機會に於ける無政府主義に對する批評は畢竟此一句の敷衍に外ならぬものと謂つて好いのである。彼等に従へば、國家は階級的對抗の上にのみ存在し得るものであるから、階級別階級對抗をさへ撤廢すれば國家其者は直接之に手を觸れずとも自らにして消滅する。同時に階級別にして依然として存する限り、國家其者は之を撤廢する事の出来るものではない。然らば階級別は如何にして之を撤廢するかと云へば、それはプロレタリアの手に掌握せられた國家權力の行使に依るのである。即ち國家消滅に到達すべき道は自由ではなくて權力強制にあるのである。而してこれが權威の破壊を第一の急務とする Bakunin をして Marx は自由を解せずと謂はしめた所以であらう。即ち Bakunin はその既に國際労働者協會内に於て Marx と激烈なる鬭争を開始した後、於て Proudhon と Marx との比較を試みた事がある。

其中に彼れは唯物論者としての Marx の、遂に唯心論を脱却するとの出来なかつた Proudhon に對する優越を充分承認した後、斯う記して居るのである。「同時に他方に於いて Proudhon は Marx よりも遙かによく自由を理解し、且つ感得してゐた。

Proudhon は學説と空想とを振廻はしはしなかつたが、革命家の眞本能を有てゐた。彼れはサタンを崇拜して無政府を説いた。Marx は或は向上して Proudhon よりも一層合理的な自由なる体系に到達するかも知れない。併し彼れには Proudhon の本能が缺けてゐる。獨逸人にして猶太人たる彼れは、顛頂から趾端に至るまで一個の權威主義者(Autoritär)であらう。(F. Mehring, Karl Marx III, Auf. 411)

Bakunin の無政府主義説は系統ある著述としては説かれてゐないが、一八六九年の Berne に開かれた平和自由聯盟の大會に於ける演説の如きはよく其立場を示すものと認めて宜からう。Bakunin は此大會に於て聯盟が階級並に個人の經濟上並に社會上の平等化を求むる宣言を發表すべきことを提議したが、Chaudey 其他の代議員は、共產主義を説くものとして Bakunin を責めた。此非難に對して Bakunin は憤慨して左の如く抗議したのである。「階級並に個人の平等化を要求するの故

を以て、Brusselsに於ける労働者大會と共に集合所有に賛成したるの故を以て、私は共產主義者たるの非難を受けた。私は實に Proudhonの遺言執行者たる Chaudey氏が此差別を解せざることを驚くものである。私は共產主義を嫌悪する。それは自由の否定だからである。而して私は自由なくして如何なる人間的のものをも想像することが出来ないのである。私は共產主義者ではない。共產主義は社會の有ゆる力を集中して國家をして之を吸収せしめ、又それは必然國家の手に財産を集中せしむることを以て終るからである。反之私は國家の撤廢を欲求する。一人を教化し、且つ文明に向はしめるとの口實の下に、今に至るまで之を壓迫し、之を搾取し、之を奴隷化せしめ、腐敗せしめたる此の國家の權威と守護との主義の根本的剿絶を欲求するものである。私は社會の組織及び集会的又は社會的所有の組織が自由聯合の方法に由つて下より上に行はれんことを欲して、その或種の權威に由つて上より下へ行はれんことを欲せざるものである。國家の撤廢を欲する私は、國家の制度に外ならず、國家の原理の一結果に過ぎぬ個人的相續財産の撤廢を欲求する。諸君、これが私の集産主義者であつて、全く共產主義者でないことを謂

ふ意味である。[George Plechanoff, Anarchism and Socialism, trans. by Eleanor Marx Aveling, London 1906, p. 48]

同じ大會に於て Bakuninは別に「苟も各人の最完全なる自由を基礎とせざる政治的社會的組織を承認せんとするものは吾々ではない。系統的に一切の權威と一切の守護的權力とを否認し、自由の名に於て國家の『權威的』原理(authoritarian principle)其者の廢止を要求する吾々ではないのである。」とも云つて居る。(ibid., pp. 48-9)

Bakuninに取つては教會と國家とは「二黒獸」bêtes noiresであつた(God and the State)此二物は如何なる形態を以て現れても、其本質に變りはないのである。「一言にして云へば、吾々は一切の立法、一切の權威を排斥し、一切の特權、特許を與へられたる公式合法的の勢力を排斥して、敢てその普通投票權から生ずるものをも假籍しないのは、それが必ず支配者の地位にある少數搾取者の利益となつて、之に服従する絶大多數者の利益に反することを確信するからである。それが吾々が眞に無政府主義者であると云ふ意味である。」(Michael Bakunin, God and the State. With a Preface by

Carlo Cafiero and Elisée Reclus. Freedom Press 1910 p. 22) 而して革命は直ちに此國家其

者に手を觸れなければならぬのである。一の根本的革命の爲めには諸陣地と諸物とを攻撃し、所有權と國家とを破壊しなければならぬ。……人間に對して人間的たらんとする權利を得んが爲め、諸陣地と諸物とに對して無假籍でなければならぬ。吾人は一切のもの、殊に就中所有權と其不可離の伴侶、即ち國家とを破壊しなければならぬ。これが革命の秘密である」(Zitiert bei Cunow, *Marsche Geschichte-Gesellschaft-und Staatstheorie I 335*)。

(十三)

屢々引用せられる通り、Marxは其Gotha綱領案批評の書簡中に於て資本主義社會と共產主義社會との中間には一より他への過渡階段があつて、其階段に於ける國家は無産者獨裁に外ならぬものであると説いてゐる。此の所謂無産者獨裁は果してデモクラシイの範圍内に於て行はるゝものか、或はデモクラシイとは相容れぬ特別の統治形態であるかに就ては見解の相違を見るが、兎に角無産階級の獨裁が、無産階級が他階級を抑壓して單獨支配を行ふ一個の國家、一個の統治であることは疑を容れぬ。斯く無産階級が單獨支配を行ふことに由つて、階級別は撤廢

せられ得るものとMarx-Engelsは考へたのである。此點に於て渠等はBakuninの權威否定論者なるに對して、明かに權威肯定論者であつた。而して彼等の見るところを以てすれば、直ちに權威其者を否定することは無用でなければ、無效に終らざるを得ないのである。無用と云ふのは、階級別其者が撤廢せられた曉には、權威は否定することを俟たずに消滅すべき筈であるし、無效と云ふのは階級別其者にして儼存する限りは權威は否定せんと欲しても否定することが出来ぬからである。國家は階級的對抗の謂はゞ結果であるから、國家を以て第一に撤去すべき主要害悪と見ることは、首尾顛倒の論と云はなければならぬ。Engelsがインタナショナル海牙會議(一八七二年)に先だつて、獨逸の社會主義者Cunoに與へた書簡はよく此點を明にして居る。曰く

「Bakuninは奇妙なる學説を有つて居る。それはブルドン主義と共和主義との混合物であつて、その第一の重要特色は、その資本、及び社會的進化に由つて生じた資本と賃銀労働者との階級對抗を以て、除かるべき主要害悪とせず、國家を以てそれとすることである。社會民主々義労働者の大衆は、吾々と共に國家權力は支配

階級(地主及び資本家)が其社會的特權を保護する爲めに造出した組織に外ならぬものと認めて居るに反して、Bakuninは國家が資本を造り出し、資本家は其資本を纔かに國家の恩恵によつて有するものと主張するのである。即ち國家は首惡であるから、人は第一に國家を撤廢しなければならぬ。さうすれば資本は自らにして地獄に墮ちると謂ふ。吾々は反對に資本を、即ち全生産要具の少數者の手に占有せらるゝ事を撤廢すれば、國家は自らにして倒れると云ふのである。此差別は重要である。社會的革命なき國家の撤廢は沒條理である。資本の撤廢は即ち正に社會革命であつて、全生産方法の變革を其中に含むものである。然るに Bakunin 取つては國家が根本悪なのであるから、共和國にもせよ、王國にもせよ、若しくは何にもせよ、苟も國家を存續せしむることは、してはならぬのである。従つて一切の政治からの離隔と云ふ結論が生ずる。政治的行動に従ふこと、殊に選舉に参加することは、主義を賣るものである。人は宣傳を行ひ、國家を罵り、組織を造らねばならぬ。而して凡ての勞働者、即ち其多數を其味方となし得た時に、一切の官廳を撤廢し、インタナショナルの組織を以て之に代らしめる。千年王國の端を開く此の

偉大の行業を社會清算と稱するのである。——上記の事は凡て極めて急進的の響きを持ち、且つ五分間内に暗誦し得る程簡單であるところから、此の Bakunin の學説は、伊太利及び西班牙に於て少壯辯護士學士並に其他の理論家の間に於て速かに同應者を見出したのである。併し勞働者の大衆は、其國の公共問題が同時に彼等自身の問題でないと言ふ説を決して信用せぬであらう。彼等は天性政治的であるから、彼等に政治を放擲しなければならぬと説く者は、結局彼等の見棄て去るところとなるであらう。勞働者に有ゆる場合に政治を斷念すべきことを説くのは彼等を驅つて僧侶カブルジョワ共和主義者かの双腕中に投せしめる所以である。——さて今インタナショナルは、Bakunin に従へば、政治的闘争の爲めにはなく、社會的清算に際して直ちに之をして舊國家組織に代ることを得しむる爲めに造らるべきものであるから、それは成るべく Bakunin の將來社會の理想に近づかなければならぬ。此社會には第一に何等の權威がない。權威即ち國家國家即ち絶對惡だからである。(究局に於て決斷を下す一の意思なくして、即ち統一的指揮なくして、如何にして工場を經營し、汽車を走らせ、船舶を航行せしめんとするか、此

に就ては彼等は説明するところなし。多數者の少數者に對する權威も亦消滅する。各個人各地方團體は獨立自治を行ふのである。併し僅か二人の人より成る社會にしても、それが各人が其自主權の一部を放棄することなくして、如何にして成立ち得るか、これも亦 Bakunin の不問に附するところである。下略^二。(Kommunismus und Bakunismus. Die Bakunisten an der Arbeit von Friedrich Engels. Hrsg. von Franz Diederich Berlin 1920 S. 5-7)

近世資本主義と殖民經濟 (四)

阿部 秀助

六

吾人が既に前に述べしが如く當時の西班牙が其殖民地より齎らせし商品中、其價格に於て又た同國民の運命に與へし影響の著しかりし點に於て最も重要な意義を有せしものは金銀の如き貴金屬にして是等殖民地の諸鑛山に對する西班牙政府の態度は尙ほ中世の時代に見るが如く總て王室の所有にして、例者、千五百一年フェルヂナントとイサベラとは國王の許可なくして之れが殖民地内にある諸鑛山を採掘すること能はざること公布したのである、然るに千五百四年に至つて一般西班牙人に之れが採掘權を與ふると共に、採掘せられしものは總て王立鑛所 (Casa de fundición) に齎らす可きことを規定し、其後千五百二十六年十二月の勅令は更に採掘權の所有者を亞米利加印度人に及ぼし、更に千五百八十四年フエッ